



南オーストラリア大学での研究生生活 豊崎 仁美

<はじめに：オーストラリア・アデレード>

私は、2016年10月から、所属大学の派遣プログラムを利用して、オーストラリア・南オーストラリア州アデレードにある南オーストラリア大学ビジネススクールに客員研究員として留学をしています。

早いもので、アデレードに来て、5ヶ月が経とうとしています。アデレードの街は整備されていて、これまで危ないと感じたことは一度もないほど、治安の良い街です。交通網も整備されており、バスや電車、車のほかに、市内には、市内有数の観光地であるグレネグビーチと市中心部を結ぶトラム（路面電車）が走っています。市内からこのトラムに乗ってわずか30分ほどでビーチに行くことができ、自然に触れあえるのがアデレードのいい所の1つであると思っています。

<南オーストラリア大学ビジネススクールでの研究生生活>

私の留学先である南オーストラリア大学は、1991年に創設された比較的新しい大学です。世界大学ランキングで設立50年以内の大学の中で総合100位以内に出選され、歴史の浅い大学ではありますが、世界的に高い評価を得ている大学です。学生の構成としては、学部であればオーストラリア人が半数、留学生が半数であり、大学院は、中国や韓国、インドなどアジアからの留学生が大多数を占めています。大学のキャンパスを歩いていると、ここがオーストラリアだとは思えないほど、アジア系の学生が非常に多いのが印象的です。

そして、私が所属する南オーストラリア大学ビジネススクールは、設立以来、非常に多くの卒業生を輩出し、卒業後は地元企業の幹部としてご活躍されている方が多いスクールです。また、ビジネススクールの認定機関 EQUIS (European Quality Improvement System) の認定を受けています。EQUIS は、研究、教育、学生サービス、国際化、産業界への貢献などの観点から質の高さが認められた教育機関が認定されます。現在、EQUIS 認定のビジネススクールは世界 38 カ国、139 校あり、南オーストラリア大学ビジネススクールはオーストラリアに 8 校ある EQUIS 認定校の 1 つです。

今回の南オーストラリア大学ビジネススクールへの留学の目的は、概念フレームワークの構築と実証の方法論を学ぶことにあります。加えて、将来、研究成果を海外ジャーナルに投稿するアプローチを知ること为目标としています。

現在、私は「マネジメント・コントロール・システムが従業員の自発的行動を動機づけるメカニズム」について、研究をしています。この研究の基礎理論として「場の理論」(伊丹, 2005)¹を用いています。場の理論は、マネジメント・コントロール・システムや組織構造、戦略、インセンティブ・システム、人事管理システム、リーダーシップなどといった経営の手段が、場の 4 つの要素(アジェンダ、情報のキャリア、解釈コード、連帯欲求)の共有を高めることで、場で起きる組織メンバー間の情動的相互作用(コミュニケーション)を活性化し、その結果、共通理解と心理的エネルギーが生まれ、それらがメンバー間の協働や学習を動機づけると考える理論です。

しかし、この場の理論について書かれた英語論文はほとんどなく、この理論を知っている海外の先生や院生はほとんどいません。そのため、用いられている言葉の意味や場の理論で想定している因果関係、その必要性について質問を受けることがよくあります。

たとえば、同じ分野の先生である Bruce Gurd 先生からは、「場とは何か」、「場と情動的相互作用の違いはなにか」といったことから「メンバー間の情動的相互作用の結果、共通理解が生まれるという因果関係が想定されているが、なぜか、そしてそれがなぜ組織に必要なのか」や「Simons (1995)²が提唱した理論である Levers of control とはどう違うのか」といった質問を受けました。

このような質問に英語でどのように答えたらよいか分からないために、もどかしさを感じることがあります。そのもどかしさのなかで、改めて自身の研究を見つめなおしたり、理論に対する理解を深めたりするなど基本に立ち戻ることをしています。英語でうまく伝えられないもどかし

¹ 伊丹敬之 (2005) 『場の論理とマネジメント』東洋経済新報社。

² Simons, R. (1995). *Levers of Control: How Managers Use Innovative Control Systems to Drive Strategic Renewal*, Harvard Business School Press, Massachusetts. (中村元一訳 (1998), 『ハーバード流「二一世紀経営」四つのコントロール・レバー』産能大学出版部。)

さが、自身の研究や理論に対する理解を深めることにつながっており、このことは、留学に来てよかったと思う点の1つです。

研究手法については、統計手法に詳しい先生からアドバイスを頂戴したり、学内で開催される研究手法に関するセミナーへ参加したりするなどしています。学内で開催されるセミナーには、世界中から著名な先生がいらして、講義をしてくださることも多く、研究手法だけでなく、トップジャーナルに採用されるためのヒントや研究者としての姿勢なども学んでいます。

最後に、指導教員である鈴木先生からは、グーグルのハングアウトというビデオチャットを用いて指導をいただいております。海外にいても指導を受けられる環境があるからこそ、修士時代に留学をすることができました。

<むすびにかえて>

この原稿を執筆する中で、世界的に認められたビジネススクールで最先端の研究や研究手法を学ぶことができ、同時に自身の研究を成果としてまとめられるようなアプローチを学べる環境がいかに恵まれているかを感じています。本連載に投稿する機会をえることで、アデレードに来た目的を再確認し、限られた時間のなかで、できる限り多くのことを学び、経験し、吸収したいと気持ちを新たにいたしました。この機会を与えてくださった IASM に感謝の気持ちを表して結びとさせていただきます。

(執筆者)

豊崎仁美氏は、明治大学大学院経営学研究科 博士前期課程 1年

